文芸

俳句

踏青や山河はつねに新しき　池田　逸子

つちふるや化学粉塵混り来る　伊藤　敬子

花曇り化粧濃くして友に会ひ　今関　瀟亭子

蒔かぬ種正体不明の若芽出る　魚地　照子

対岸も此岸も花菜明りかな　江森　悦子

句想練る外は春塵の荒荒し　川島　通則

春風や白球あがり大歓声　向後　寛

野に山に雄叫び上げる春嵐　越川せつ子

凸凹の根から蘖生まれけり　小松　藤男

蕗味噌や苦味の中の母の里　佐瀬　輝夫

春塵のあと西空のうす明かり　椎名万里子

呆けまじや春の埃に愚痴つきぬ　鈴木とし子

ガラス戸に落書きする子春の塵　鈴木　利子

瀬の音を聞きつつ蝌蚪の眠るかに　玉虫　栗扇

一村の土巻きあげて春嵐　土屋美枝子

地引網のなごりの浜や初桜　土屋　義昭

芦の角北浦越えて鹿嶋まで　戸村　靜華

内視鏡すんで安堵の雪解かな　早川　勇

その中の妖しき彩や糸桜　藤田　雅夫

短歌

さまざまの雲の形に見惚れをり
春の塵吹く夕暮の村　越川　義則

ささやかな暮しに一首したためて
余生短かな日々を愛しむ　高梨　キヨ

名前より屋号呼び合ふ我が町の
のどかな暮し住みよき部落　内藤　くに

七十年苦労を共に連れ添いし
妻の介護に骨身惜しまず　伊藤　定男

亡き夫の命日今日は雨降るに
墓石をそつと拭ひてゐたり　鈴木　まさ子

捲りたるちひろが描くカレンダー
綿飴のやうな三月迎ふ　八角　三枝

年毎に枝剪り詰めし連翹は
扇の形に花の咲き初む　青木　秀子

あぜ道を散歩に行けば聞え来る
ピアノの音色に足どり軽し　平山　芳子

目の前の水の溜りを避けやうと
ハンドル切るも勢い止まず　押尾　輝子

さりげなく靴のサイズを聞きゆきて
離り住む子は送りくれたり　田崎　尚美

送別の色紙に添へて絵を描けと
言へば「え」と書く一年生は　西山満里子

雨戸打つ春の嵐に一人居の
病みゐる友の不安を思ふ　芹川　初子

咲き満つる桜大樹は校庭に
閉校あとも誰に見せなむ　島田ますみ

夜半を覚め眠れぬままに思ひ出す
童謡いくつ口遊みゐつ　斉藤つね子

こうほう博物館 62

古川の石合大師

古川地区の西のはずれに石合という小高い山があり、その頂上にあるお寺の堂の周りにはお坊さんを刻んだ石仏がたくさん並んでいる。この石仏は、江戸時代に造立された大師像である。大師と言えば弘法大師が思い浮かぶが、ここにあるのは全て弘法大師像である。

弘法大師とは空海の別名で、平安時代初めに香川県で生まれ、中国へ留学して真言密教を修した後、帰国し高野山金剛峰寺を開山し、日本に真言密教を伝えた。それだけでなく、困窮にあえぐ民を救い、井戸やため池などの土木工事を行うなど、各地に多くの伝説を残した。

そうしたことから、弘法大師の遺徳をしのび、大師信仰が生まれた。その代表が四国八十八箇所霊場巡礼である。石合大師には、八十八の大師が並び、ここをまわれば四国霊場を巡ったのと同じご利益があると言われる。また、町内にはあちこちに石のお大師さんがあり、四月にまわる大師講がある。この地域にも根強く大師信仰が残っている。

町民ギャラリーでは、四月から「鈴木総男画四国八十八箇所描画巡礼の旅展」が開催されている。

▶石合大師